

武蔵野



武蔵野支局 〒180-0006
 武蔵野市中町1の13の1 3F
 電話 0422(51)3131
 FAX 0422(51)3133
 musasino@yomiuri.com
 都内版編集室 電話03(3217)1465・1466
 江東支局 電話03(3631)6116
 立川支局 電話042(523)4477
 ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は
0120-4343-81

【広告】読売Palette
 03(6272)9027
 【折込チラシ】 0120-03-4343
 【読売旅行】 03(5550)0666

3月17日(木曜日)
 旧 2月15日<仏滅>

通日 76
 月齢14.4
 (正午)



—東京標準—
 満潮 5.00
 16.34
 干潮 10.54
 23.07
 (大潮)

あすの暦

日出 5.50
 日入 17.50
 月出 16.43
 月入 5.27

「虫の音楽」愛でる楽園

文人の
 武蔵野

ラファディオ・ハーン(1850~1904年)は1890年に来日し、出雲の松江で教師生活に入ります。91年、住み込みの「女中」として家に来た小泉セツと出逢い、まもなく事実婚の状態に。96年には日本に帰化して小泉八雲と改名し、セツとは法的にも婚姻関係を結びます。手続きが完了したその翌日、八雲は作品集「異国風物

小泉八雲 ②



小泉八雲の妻セツ。八雲の「美的生活」はセツとの二人三脚によるものだった(小泉八雲記念館提供)

と回想(Exotics and ret respectives)」を脱稿します。98年に米国で上梓される同書は、訪日旅行者の読者を想定して、異邦人の感性が容易に及び難いと思われる日本の「非常に洗練された芸術的な国民の美的生活」を描いています。

「虫の音楽家」(Insect-

Musicians」と題した章では、いい声で「歌う虫」を飼うしきたりが日本にはあり、虫選や虫遊びを主題にした稀有な文学が1000年前から存在することを伝え、詩歌の中の虫を自筆の絵とともに紹介しています。また、虫の音を聴くたのしみのためだけに「いなかの在郷などへ秋の遠足に出かけ」る習慣があることにも言及し、その上で、「音楽的な人寄せだけで名を知られていた遊山の場所」の一つとして「武蔵野」の名を挙げています。

明治の日本で八雲が過ごした「美的生活」は、セツとの二人三脚によるものでした。伝統邦楽に「虫の武蔵野」という箏曲の名作があります。昭和に入ってから作品です。八雲は、「虫の音楽」

おすすめの1冊

「八雲の妻 小泉セツの生涯」(長谷川洋二)

八雲の妻・小泉セツの評伝です。セツの回想録「思ひ出の記」も併録しています。働きすぎだと案じるセツに八雲は「私の好きの遊び、あなたよく知る、ただ思ふ、と書くことです。書く仕事あれば、私疲れない、と喜ぶです」と答えます。興味深い虫眼鏡の話や飼っていた松虫のエピソードも記されています。



(今井書店)

を愛でる「美的感受性」の及ぶ場所を「楽園」と呼び、「どこの国の人になっても想像もつくまい」と嘯いています。今や日本人になっても容易には想像のつかない世界と言えるかもしれません。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)